

括] ^{123}I -BMIPP 心筋 SPECT の後期像により、高率に労作性狭心症の冠狭窄病変の検出が可能である。特に、多枝病変の検出に有用であることが示唆された。

28. 狭心症における安静時 BMIPP 所見と臨床および冠動脈造影所見の対比

館野 円 玉木 長良 工藤 崇
服部 直也 多田村栄二 小西 淳二
(京大・核)

〔目的〕心筋梗塞の既往のない虚血性心疾患でしばしば認められる、安静時の BMIPP 集積低下の臨床的特徴を検討した。

〔対象および方法〕心筋梗塞の既往のない狭心症 31 例(男性 19, 女性 12, 66.4 ± 8.2 歳)を新規発症の胸痛、症状の悪化、あるいは安静時胸痛、を示す不安定狭心症群(19 例)と安定狭心症群(12 例)に分類。安静空腹時の BMIPP 早期像および冠動脈造影(31 例)、左室造影(29 例)を施行。

〔結果〕BMIPP SPECT による冠動脈病変検出の感度は不安定狭心症群 79%, 安定狭心症群 38%であった。特異度は、不安定狭心症群で 62%, 安定狭心症群 86%であった。さらに、不安定狭心症群、安定狭心症群ともに、冠動脈の狭窄が強いほど、BMIPP の集積低下が著しい傾向があり、不安定狭心症群でこの傾向がより顕著であった。左室壁運動と BMIPP 所見の比較では、壁運動低下を示した領域のうち BMIPP 集積低下を呈したのは、不安定狭心症群で 75%, 安定狭心症群で 50%であった。不安定狭心症群では壁運動異常に高率に BMIPP 異常が伴うことが示唆された。また、壁運動が正常な領域でも不安定狭心症群では 46%に BMIPP の集積低下を認め、壁運動が正常でも、BMIPP の異常がしばしば存在することが示唆された。一方、安定狭心症群は壁運動が正常な領域の 81%が BMIPP 正常であった。

〔結論〕心筋梗塞の既往のない虚血性心疾患における安静時 BMIPP SPECT の集積低下は、心筋虚血の頻度、重症度に関係していると考えられた。

29. 冠攣縮性狭心症における ^{123}I -BMIPP 心筋シンチグラフィの臨床的意義

伊藤 一貴 松本 雄賀 寺田 幸治
谷口 洋子 大槻 克一 中川 達哉
東 秋弘 中川 雅夫(京府医大・二内)
杉原 洋樹 前田 知穂 (同・放)

〔背景〕冠攣縮性狭心症(VSA)では、検査時に冠攣縮が誘発されないかぎり運動負荷 ^{201}Tl 心筋シンチグラフィ(EX-Tl)で異常を検出することは困難である。一方、 ^{123}I -BMIPP 心筋シンチグラフィ(BM)は検査時に虚血がなくても虚血圧を反映した集積低下所見を示すことがある。〔目的〕BM が VSA の診断および病態評価に寄与するかを検討すること。〔対象〕冠動脈造影時エルゴノビン負荷により冠攣縮が誘発された梗塞歴のない VSA 20 例。〔方法〕BM は安静時に 111 MBq の BMIPP を静注し 15 分後より撮像した。また、同時期の EX-Tl より初期像(EX)と遅延像(RD)を得た。再構成した SPECT 像の左室は 17 領域に分割し、各領域の BMIPP および Tl の集積低下程度を視覚的に高度低下：3 から正常：0 の 4 段階の defect score (DS) とした。左室造影像は 7 領域に分割し、各領域の局所壁運動異常の程度を無収縮：3 から正常収縮：0 の 4 段階の wall motion score (WS) とした。〔検討項目〕①心筋脂肪酸代謝異常の有無：各冠動脈領域における BM の DS の総和が 2 以上を集積低下陽性とした。②心筋灌流異常の有無：各冠動脈領域の Tl の DS の総和が 2 以上を陽性とした。③BM の集積低下程度と、罹病期間、発作回数、最終発作からの期間、左室駆出率および局所壁運動異常の程度との関連をそれぞれ検討した。〔結果〕①VSA の診断率は BM：70%, EX-Tl：15%であった。②BM の集積低下程度は壁運動異常の程度と最終発作からの期間と関連した。③BM の集積低下程度と発作回数、罹病期間および左室駆出率とは関連しなかった。〔総括〕 ^{123}I -BMIPP 心筋 SPECT は冠攣縮による心筋虚血圧を“memory”した像を示し、冠攣縮性狭心症の診断および病態把握に有用であることが示唆された。